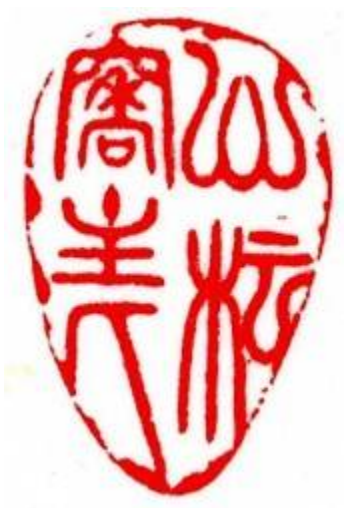


アンソロジーの誘惑

奇形学の紋章

近代詩篇 詩人の群像



——アンソロジーとは偏愛といふ奇形学である。
テラトロジー

藪野直史

「やぶちゃん注：藤森安和までは、かつて新米教師時代の私が作った、ガリ版の近現代詩授業用のオリジナル教材「詩人の群像」が原型である。私には殊の外懐かしいものである。なお、従ってこのパートでは全体に新字表記を採用している。ただ、PDF化に際し、一部の正字が転倒するため、止むを得ず、新字若しくは気持ちの悪い通用字体（「瀧」を「澆」など）に変更してある。悪しからず。」

アンソロジーの誘惑／近現代詩篇

詩人の群像

《島崎藤村「若菜集」〔明治三〇（一八九七）年刊〕より》

初恋

まだあげ初めし前髪の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の

花ある君と思へけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

薄紅の秋の実の

人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に

おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

《蒲原有明「草わかば」〔明治三五（一九〇二）年刊〕より》

牡蠣の殻

牡蠣の殻なる牡蠣の身の
かくもはてなき海にして
独りあやふく限りある
その思ひこそ悲しけれ
身はこれ盲目すべもなく
巖のかげにねむれども
ねざむるままにおほうみの
潮のみちひをおぼゆめり
いかに黎明あさ汐の
色しも清くひたすとして
朽つるのみなる牡蠣の身の
あまりにせまき牡蠣の殻

たとへ夕づついと清き

光は浪の穂に照りて

遠野が鳩の面影に

似たりとてはた何ならむ

痛ましきかなわたつみの

ふかきしらべのあやしみに

夜もまた昼もたへかねて

愁にとざす殻のやど

されど一度あらし吹き

海の林のさくる日に

朽つるままなる牡蠣の身の

殻もなどかは碎けざるべき

◇夕づつ…夕暮れに西空に見える金星。宵の明星。

◇わたつみ…海。

《北原白秋「思ひ出」〔明治四四（一九一三）年刊〕より》

接吻

臭のふかき女来て

身体も熱くすりよりぬ。

そのときそばの車百合

赤く逆上せて、きらきらと

蜻蛉動かず、風吹かず。

後退ざりつつ恐るれば

汗ばみし手はまた強く

つと抱きあげて接吻けぬ。

くるしさつらさなつかしさ。

草は萎れて、きりぎりす

暑き夕日にはねかへる。

《高村光太郎「道程」〔大正三（一九一四）年刊〕より》

道程

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

僕から眼を離さないで守る事をせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため

《高村光太郎「智恵子抄」〔昭和十六（一九四一）年刊〕より》

あどけない話

智恵子は東京に空が無いといふ、

ほんとの空が見たいといふ。

私は驚いて空を見る。

桜若葉の間に在るのは、

切つても切れない

むかしなじみのきれいな空だ。

どんよりけむる地平のぼかしは

うすもも色の朝のしめりだ。

智恵子は遠くを見ながら言ふ。

阿多多羅山の山の上に

毎日出てゐる青い空が

智恵子のほんとの空だといふ。

あどけない空の話である。

◇阿多多羅山…智恵子の郷里福島県二本松町漆原にある。

裸形

智恵子の裸形を私は恋ふ。
つつましくて満ちてゐて
星宿のやうに森厳で
山脈のやうに波うつて
いつでもうすいミストがかかり、
その造型の瑪瑙質に
奥の知れないつやがあつた。
智恵子の裸形の背中の小さな黒子まで
わたくしは意味ふかくおぼえてゐて、
今も記憶の歳月にみがかれた
その全存在が明滅する。
わたくしの手でもう一度、
あの造形を生むことは

自然の定めた約束であり、
そのためにおたくしに肉類が与へられ、
そのためにおたくしに畑の野菜が与へられ、
水と小麦と牛酪とがゆるされる。
智恵子の裸形をこの世にのこして
おたくしはやがて天然の素中に帰らう。

◇星宿..星座。

◇瑪瑙..宝石の名。樹脂状の美しい光沢がある。

◇素中..原初の存在。生命以前のカオス（混沌）的世界を想起す
べきか。

《山村暮鳥「聖三稜玻璃」〔大正四（一九一五）年刊〕より》

噺語

竊盜金魚

強盜喇叭

恐喝胡弓

賭博ねこ

詐欺更紗

流職天鷲絨

姦淫林檎

傷害雲雀

殺人ちゅうりつぷ

墮胎陰影

騷擾ゆき

放火まるめろ

誘拐かすてえら。

◇竊盜…窃盜。

◇胡弓…三味線に似て、それより小さい東洋の弦楽器。

◇更紗…木綿布に人物・花鳥・幾何学模様等をいろいろな色で押

し写し、また印刷したもの。

◇洗職…汚職。

◇天鵞絨…綿・絹・毛等で織り、毛を立てた柔らかく滑らかな布。

◇騷擾…騷乱。

◇まるめろ…バラ科。春、ボケに似た花をつけ、果実は黄色で甘

酸っぱく香気があり、砂糖漬けとして食用。カリン。

岬

岬の光り

岬のしたにむらがる魚ら

岬にみち尽き

そらに澄み

岬に立てる一本の指。

風景

純金もぎいく

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

かすかなるむぎぶえ

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

《萩原朔太郎「月に吠える」〔大正六（一九一七）年刊〕より》

竹

光る地面に竹が生え、

青竹が生え、

地下には竹の根が生え、

根がしだいにほそらみ、

根の先より繊毛が生え、

かすかにけふる繊毛が生え、

かすかにふるへ。

かたき地面に竹が生え、

地上にするどく竹が生え、

まつしぐらに竹が生え、

凍れる節節りんりと、

青空のもとに竹が生え、

竹、竹、竹が生え。

◇りりん..凜々。寒さなどが身に染みる様子。

蛙の死

蛙が殺された、

子供がまるくなつて手をあげた、

みんないつしよに、

かはゆらしい、

血だらけの手をあげた、

月が出た、

丘の上に人が立つてゐる。

帽子の下に顔がある。

幼年思慕篇

さびしい人格

さびしい人格が私の友を呼ぶ、

わが見知らぬ友よ、早くきたれ、

ここの古い椅子に腰をかけて、二人しづかに話してゐよう、

なにも悲しむことなく、きみと私でしづかな幸福な日をくらさう、

遠い公園のしづかな噴水の音を聞いて居よう、

しづかに、しづかに、二人でかうして抱き合つて居よう、

母にも父にも兄弟にも遠くはなれて、

母にも父にも知らない孤兒の心をむすび合はさう、

ありとあらゆる人間の生活の中で、

おまへと私だけの生活について話合はう、

まづしいたよりない、二人だけの秘密の生活について、

ああ、その言葉は秋の落葉のやうに、そうそうとして膝の上にも散つてくるではないか。

わたしの胸は、かよわい病氣したをさな兒の胸のやうだ。

わたしの心は恐れにふるへる、せつない、せつない、熱情のうるみに燃えるやうだ。

ああいつかも、私は高い山の上へ登つて行つた、けはしい坂路をあふぎながら、虫けらのやうにあこがれて登つて行つた、

山の絶頂に立つたとき、虫けらはさびしい涙をながした。

あふげば、ぼうぼうたる草むらの山頂で、おほきな白っぽい雲がながれてゐた。

自然はどこでも私を苦しくする、

そして人情は私を陰鬱にする、

むしろ私はにぎやかな都会の公園を歩きつかれて、とある寂しい木蔭に椅子をみつけるのが好きだ、

ぼんやりした心で空を見てゐるのが好きだ、
ああ、都会の空をとほく悲しくながれてゆく煤煙、
またその建築の屋根をこえて、はるかに小さくつばめの
の飛んで行く姿を見るのが好きだ。

よにもさびしい私の人格が、
おほきな声で見知らぬ友を呼んで居る、
わたしの卑屈な不思議な人格が、
鴉のやうなみすぼらしい様子をして、
人気のない冬枯れの椅子の片隅にふるへて居る。

◇さうさう…層々。かさなりあっているさま。後に詩集「蝶を夢
む」再録時には「さうさう」となる。その場合は、「早々」
「愴々」等が考えられる。

◇うるみ…涙などで 湿ってくもること。その「熱情」の内包す
る限らない悲痛を対比的言辞で表現したものか。

死なない蛸

或る水族館の水槽で、ひさしい間、飢ゑた蛸が飼はれてゐた。地下の薄暗い岩の影で、青ざめた玻璃天井の光線が、いつも悲しげに漂つてゐた。

だれも人人は、その薄暗い水槽を忘れてゐた。もう久しい以前に、蛸は死んだと思われてゐた。そして腐つた海水だけが、埃つぽい日ざしの中で、いつも硝子窓の槽にたまつてゐた。

けれども動物は死ななかつた。蛸は岩影にかくれて居たのだ。そして彼が目を覚ました時、不幸な、忘れられた槽の中で、幾日も幾日も、おそろしい飢饉を忍ばねばならなかつた。どこにも餌食がなく、食物が全く尽きてしまつた時、彼は自分の足をもいで食つた。まづその一本を。それから次の一本を。それから、最後に、それがすつかりおしまひになつた時、今度は胴

を裏がへして、内臓の一部を食ひはじめた。少しづつ他の一部から一部へと。順順に。

かくして蛸は、彼の身体全体を食ひつくしてしまつた。外皮から、脳髓から、胃袋から。どこもかしこも、すべて残る隈なく。完全に。

或る朝、ふと番人がそこに来た時、水槽の中は空っぽになつてゐた。曇つた埃っぽい硝子の中で、藍色の透き通つた潮水と、なよなよとした海草とが動いてゐた。そしてどこの岩の隅隅にも、もはや生物の姿は見えなかつた。蛸は実際に、すつかり消滅してしまつたのである。

けれども蛸は死ななかつた。彼が消えてしまつた後ですらも、尚ほ且つ永遠にそこに生きてゐた。古ぼけた、空つぽの、忘れられた水族館の槽の中で。永遠に——おそらくは幾世紀の間を通じて——或る物すごい欠乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た。

《大手拓次「藍色の墓」〔昭和一二（一九三七）年刊〕より》

藍色の墓

森の宝庫の寝間に

藍色の墓は黄色い息をはいて

陰湿の暗い暖炉のなかにひとつの絵模様をかく。

太陽の隠し子のやうにひよわの少年は

美しい葡萄のやうな眼をもつて、

行くよ、行くよ、いさましげに、

空想の獵人はやはらかいカンガルウの編靴に。

むらがる手

空はかたちもなくくもり、

ことわりもないわたしのあたまのうへに、

錨をおろすやうにあまたの手がむらがりおりる。

街のなかを花とふりそそぐ亡霊のやうに

ひとしづくの胚株をやしなひそだてて、

ほのかなる小径の香をさがし、

もつれもつれる手の愛にわたしのあたまは野火のやうにもえたつ。

しなやかに、しろくすずしく身ぶるひをする手のむれは、

今わたしのあたまのなかの王座をしめて相姦する。

春の日の女のゆび

この　ぬるぬるとした空気のゆめのなかに、

かすかずのをんなの指といふ指は

よろこびにふるへながら　かすかにしめりつつ、

ほのかにあせばんでしづまり、

しろい丁字草のにほひをかくして　のがれゆき、

ときめく波のやうに　おびえる死人の薔薇をあらはにする。

それは　みづからでた魚のやうにぬれて　なまめか

しくひかり、

ところどころに眼をあけて　ほのめきをむさぼる。

ゆびよ　ゆびよ　春のひのゆびよ

おまへは　ふたたびみづにいらうとする魚である。

《佐藤春夫「我が一九二二年」「大正二二（一九二三）年刊」より》

月をわび身を侘びつたなきをわぶとこたへん
んとすれど問ふ人もなし——芭蕉翁尺牘より

秋刀魚の歌

あはれ

秋風よ

情あらば伝えてよ

——男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食ひて

思ひにふける と。

さんま、さんま

そが上に青き蜜柑の酸をしたたらせ

さんま 食ふはその男が ふる里の ならひなり。

そのならひをあやしみなつかしみて女は

いくたびか青き蜜柑をもぎて夕餉にむかひけむ。

あはれ、人に捨てられんとする人妻と

妻にそむかれたる男と食卓にむかへば、

愛うすき父を持ちし女の児は

小さき箸をあやつりなやみつつ

父ならぬ男にさんまの腸をくれむと言ふにあらざや。

あはれ

秋風よ

汝こそは見つらめ

世のつねならぬかの団欒を。

いかに

秋風よ

いとせめて

証せよ かの一ときの団欒ゆめに非ずと。

あはれ秋風よ

情あらば伝へてよ、

夫を失はざりし妻と

父を失はざりし幼児とに伝えてよ

——男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食ひて

涙をながす と。

さんま、さんま、

さんま苦いか塩つばいか。

そが上に熱き涙をしたたらせて

さんまを食ふはいづこの里のならひぞや。

あはれ

げにそは問はまほしくをかし。

◇第二連の情景は、小田原市十字町の作家谷崎潤一郎の家で、春

夫二九歳、谷崎千代（潤一郎の妻）二五歳。「妻にそむかれた男」

とあるのは、大正九（一九二〇）年に春夫が離婚したことを指

すのであろう。

《芥川龍之介「大正一四年四月一七日付 室生犀星宛書簡より」》

相聞

また立ちかへる水無月の
歎きをたれにかたるべき
沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

《尾形亀之助「色ガラスの街」〔大正一四（一九二五）年刊〕より》

病氣

ヤサシイ娘ニダカレテキル　トコロカラ私ノ病氣ガ
ハジマリマシタ

私ハ　バイキンノカタマリニナツテ
娘ノ頬ノトコロニ飛ビツキマシタ

娘ハ私ヲ　ホクロトマチガヘテ

丁度ヨイトコロニイル私ヲ中心ニシテ化粧シマス

不幸な夢

「空が海になる

私達の上の方の空がそのまま海になる

日——」

そんな日が来たら

そんな日が来たら笹の舟を沢山つくつて

仰向けに寝ころんで流してみたい

雪

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

村

鹿は麻縄にしばられて、暗い物置小屋にいれられてゐた。何も見えないところで、その青い眼はすみ、きちんと風雅に坐つてゐた。芋が一つころがつてゐた。

そとでは桜の花が散り、山の方から、ひとすぢそれを自転車がしいていつた。背中を見せて、少女は藪を眺めてゐた。羽織の肩に、黒いリボンをとめて。

《伊東静雄「わがひとに与ふる哀歌」〔昭和十一（一九三六）年刊〕
より》

私は強ひられる――

私は強ひられる　この目が見る野や
雲や林間に

昔の私の恋人を歩ますることを

そして死んだ父よ　空中の何処で

噴き上げられる泉の水は

区別された一滴になるのか

私と一緒に眺めよ

孤高な思索を私に伝へた人！

草食動物がするかの楽しさうな食事を

冷めたい場所で

私が愛し

そのため私につらいひとに

太陽が幸福にする

未知の野の彼方を信ぜしめよ

そして

真白い花を私の憩ひに咲かしめよ

昔の人の堪へ難く

望郷の歌であゆみすぎた

荒々しい冷めたいこの岩石の

場所にこそ

(読人不知)

深い山林に退いて

多くの古い秋らに交つてゐる

今年の秋を

見分けるのに骨が折れる

《伊東静雄「夏花」「昭和一五（一九四〇）年刊」より》

水中花

水中花と言つて夏の夜店に子供達のために売る品がある。木のうすいうすい削片を細く圧搾してつくつたものだ。そのままでは何の変哲もないのだが、一度水中に投ずればそれは赤青紫、色うつくしいさまさまの花の姿にひらいて、哀れに華やいでコツプの水のなかなどに凝としづまつてゐる。都会そだちの人のなかには瓦斯燈に照しだされたあの人工の花の印象をわすれずにあるひともあるだらう。

今歳水無月のなどかくは美しき。

軒端を見れば息吹のごとく

萌えいでにける釣しのぶ。

忍ぶべき昔はなくて

何をか吾の嘆きてあらむ。

六月の夜と昼のあはひに

万象のこれは自ら光る明るさの時刻。

遂ひ逢はざりし人の面影

一茎の葵の前に立て。

堪へがたければわれ空に投げうつ水中花。

金魚の影もそこに閃きつ。

すべてのものは吾にむかひて

死ねといふ、

わが水無月のなどかくはうつくしき。

《中原中也「在りし日の歌」〔昭和二三（一九三八）年刊〕より》

北の海

海にゐるのは、

あれは人魚ではないのです。

海にゐるのは、

あれは、浪ばかり。

曇つた北海の空の下、

浪はところどころ齒をむいて、

空を呪つてゐるのです。

いつはてるとも知れない呪。

海にゐるのは、

あれは人魚ではないのです。

海にゐるのは、

あれは、浪ばかり。

月夜の浜辺

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思つたわけでもないが
なぜだかそれを捨てるに忍びず
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた。

それを拾つて、役立てようと
僕は思つたわけでもないが
月に向つてそれは抛れず
浪に向つてそれは抛れず
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、拾ったボタンは
指先に沁み、心に沁みた。

月夜の晩に、拾ったボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

《立原道造「萱草に寄す」〔昭和一二（一九三七）年刊〕より》

草に寝て……

六月の或る日曜日に

それは 花にへりどられた 高原の
林のなかの草地であつた 小鳥らの
たのしい唄をくりかへす 美しい声が
まどろんだ耳のそばに きこえてゐた

私たちは 山のおちらに
青く 光つてゐる空を
淡く ながれてゆく雲を
ながめてゐた 言葉すくなく

——しはわせは どこにある？
山のおちらの あの青い空に そして
その下の ちひさな 見知らない村に

私たちの心は あたたかだつた

山は 優しく 陽にてらされてゐた

希望と夢と 小鳥と花と 私たちの友だちだつた

《鮎川信夫「鮎川信夫詩集」〔昭和三〇（一九五五）年刊〕より》

死んだ男

たとえば霧や

あらゆる階段の蹠音のなかから、

遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。

——これがすべての始まりである。

遠い昨日……

ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、

ゆがんだ顔をもてあましたり

手紙の封筒を裏返すようなことがあった。

「実際は、影も形もない？」

——死にそこなってみれば、たしかにそのとおりであった

Mよ、昨日のひやかな青空が

剃刀の刃にいつまでも残っているね。

だがぼくは、何時何処で

きみを見失ったのか忘れてしまったよ。

短かかった黄金時代――

活字の置き換えや神様ごっこ――

「それが、ぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて…

…

いつも季節は秋だった、昨日も今日も、

「淋しさの中に落葉がふる」

その声は人影へ、そして街へ、

黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。

埋葬の日は、言葉もなく

立会う者もなかった。

憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。

空にむかって眼をあげ

きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに

横たわったのだ。

「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」

Mよ、地下に眠るMよ、

きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。

《山之口獾「鮪に鰯」〔昭和三九（一九六四）年刊〕より》

弾を浴びた島

島の土を踏んだとたんに

ガンジューイとあいさつしたところ

はいおかげさまで元気ですとか言っ

島の人は日本語で来たのだ

郷愁はいささか戸惑いしてしまっ

ウチナーグチマデイン ムル

イクサニ サツタルバスイと言

島の人は苦笑したのだが

沖縄語は上手ですねと来たのだ

・「ガンジューイ」 〓 「お元気か」

・「ウチナーグチマデイン ムル」 〓 「沖縄方言までもすべて」

・「イクサニ サツタルバスイ」 〓 「戦争でやられたのか」

「やぶちゃん注」この注は作者自身によるもの。

鮪に鰯

鮪の刺身を食いたくなつたと

人間みたいなおことを女房が言った

言われてみるとついぼくも人間めいて

鮪の刺身を夢みかけるのだが

死んでもよければ勝手に食えと

ぼくは腹立ちまぎれに言ったのだ

女房はふいと横むいてしまったのだが

亭主も女房も互に鮪なのであつて

地球の上はみんな鮪なのだ

鮪は原爆を憎み

水爆にはまた脅やかされて

腹立ちまぎれに現代を生きているのだ

ある日ぼくは食膳をのぞいて

ビキニの灰をかぶっていると云った

女房は箸を逆さに持ちかえると

焦げた鰯のその頭をこづいて

火鉢の灰だどつぷやいたのだ

《村上昭夫「動物哀歌」〔昭和四二（一九六七）年刊〕より》

木蓮の花

五月に散る一番の花は木蓮の花だ

散って見ればそれが分るのだ

花の散る道をしじみ売りが通ってゆく

こまもの売りが通ってゆく

それはみんな貧しい人々

花が散って見ればそれが分るのだ

はるかな星雲を思う人は木蓮の花だ

宇宙が暗くて淋しいと思う人は

木蓮の花だ

花が散って見ればそれが分るのだ

◎村上昭夫／昭和二（一九二七）年岩手生。詩人村野四郎に師事。

《藤森安和「十五才の異常者」〔昭和三五（一九六〇）年刊〕より》

現代とは。やることである。

あやまるな。あやまるな。それはセンチメンタルだ。

他人に激痛を与え。他人から激痛を受けろ。

他人のくすぐったい怒りをおのれの木刀がふれるた
びに。

ぺこたん。ぺこたん。と賄賂をもっておじぎをする。

現代の若者は。打ちひしがれている。

打ちひしがれた者の泥沼から。人。人々の中に生きる
のだ。

◇以上は、詩集「十五才の異常者」の中表紙裏に記されている無

題の一篇。

嘔吐

岩波写真文庫の

ページを

私はめくった。

初めに

原爆被害市

広島

長崎が私の

眼の前にあらわれた

鉄骨の壁は

腐敗した

人間の肉のように

爛れ

木材の建物は

黒い灰のまま

くずれ

形が残り。

爛れずにいる

鉄筋の壁には

人間のとけた

黒い

死にあとがある。

人間。

女の頭は

男のように

丸坊主。

坊主頭の上には

ケロイドの山があり

男の胸には

ケロイドの

乳山がある。

男女とも

背中と言わず

足

手に

ケロイドの

溶岩が流れている。

彼らは

おのれの苦しみを

敵にふきかけようと

隣を見る。

だが

隣りにも

おれと同じ

苦しみなやむ

同伴を見る。

同伴からそらした

気違いの眼を

空に向ける。

*

次のページには

ボデイビルの肉体と
ストリップパーの肉体
がある。

*

私は

二ページ目の
人間だ。

あの原爆被害者より
百倍も幸福なのに
不幸だと言って

悲感し

姦婦の墮落した
肉体を

もてあそんでいる。

私は

幸福な人間なのだ。
マツチのケロイドに

死んでしまうと

叫ぶ

人間なのだ。

せつぶん

——兄への日記II——

ウインドウの闇に写った顔は、僕の顔ではない。みしらぬ群衆の中の目前を通り過ぎていった、ただの顔。その顔を見る僕の心は生きている。顔。たしかにウインドウの中の顔は僕の顔であるが、僕の顔でない。僕は、僕を見る心だ。

遠く、春の夜のネオンの街から、淋しき顔がやってくる。僕は淋しき顔にむかって、はやくこいと、手と足と顔でこまねきをした。

恋人の中の女が笑った。僕も笑った。

涙が僕の顔に流れた。僕のピエロを笑った、しゅんかんの恋人と失恋に涙を流したのではなく。顔と心とのへだたりをむすぶ、ただ一つの行為をできなかつた、なさけない肉体に涙を流した。

淋しき顔が、僕の眼前で笑い。春のネオンの街に、女の笑い声が消えていった。

◎藤森安和／昭和一五（一九四〇）年沼津に生まれる。現在、昼職。



◆以上の詩人の順について…原則的に詩人の生年順に配列したが、鮎川信夫と山之口獏は戦後の詩を採録したため、時代背景を考慮して後ろにずらした。

◆以上の詩の表記について…漢字のみ新字とし、他は各当該詩集（原則として初版）の表記を用いた。従って、用字や送り仮名・ルビ・句読点等の誤りについては一切訂正していない。



◆以上が概ね（鮎川信夫「死んだ男」は追加分）嘗ての私の近現代詩授業のオリジナル用の生徒への配布資料である。以下は、私の好みでサイト用に付け足したもので、以上とは全く無関係である。

道

黒田三郎

道はどこへでも通じている 美しい伯母様の家へ

ゆく道 海へゆく道 刑務所へゆく道

どこへも通じていない道なんてあるのだろうか

それなのに いつも道は僕の部屋から僕の部屋に
通じているだけなのである 群衆の中を歩きつかれ
て 少年は帰ってくる

ツルゲーネフ「新散文詩」(神西清・池田健太郎訳 一部表現を改竄)

より

巢もなしに

どこへのがれよう？ 何をしよう？ わたしは、巢のないひとりぼっちの小鳥のようだ。小鳥は羽を逆だてて、細い枯枝にとまっている。このままいるのはたまらない。……しかし、どこへ飛んで行こう？ やおら小鳥は翼をととのえ、はげ鷲に追われる子鳩さながら、はるか彼方へ矢のように飛び去る。どこかに、緑なす心地よい隠れ家はないものか？ よし仮の宿りにせよ、どこかに小さな巢をいとなむことはできまいか？ 小鳥は飛ぶ。飛びながら、一心に下界を見つめる。眼の下は、一面の黄色い砂漠。物音もない、そよぎもない、死のような砂漠。…… 小鳥は急いで砂漠を飛び越える。たえず一心に、悲し

げに下界を見つめて。

いま、目の下は海。砂漠とおなじ黄色い、死んだような海。なるほど海は、波立ち潮うしおの音を立てている。けれど、たえまない潮騒にも、単調な波のうねりにも、やはり生はなく、ねぐらもない。

小鳥は疲れる。……羽ばたきはおとろえ、飛ぶ身は降りる。空たかく舞い上がろうか。……だが、はてしない大空の、どこに巣を作ろう！

とうとう小鳥は翼をたたむ。……そしてひと声かなしく鳴いて海へ落ちる。

波は小鳥を呑み……あいも変わらぬ無意味な波音を立てながら、うねり進む。

わたしはどこへのがれよう？ わたしも、はや海へ落ちる時なのか？

さかずき

おかしなことだ。……わたしは自分におどろく。

わたしの悲哀は偽りではない。生きることが心しんからつらく、胸は悲哀にとざされて喜びひとつない。それでいてわたしは、つとめて気持ちをきらびやかに装う。人物の像や比喩を探し求める。文章を彫琢し、言葉の響きと調和に浮身をやつす。

わたしは彫物師、金細工師だ。みずから毒を盛るはずの黄金のさかずきを、一心にかたどり、きざみ、あらゆる飾りをほどこしているのだ。

誰の罪？

少女は青ざめて、優しい手をわたしに差し伸べた。：
わたしは邪険に払いのけた。みずみずしいかわい
顔が、とまどったように曇った。若々しい、人のよい
眼が、責めるようにわたしを見上げる。いたいけな清
らかな心には、わたしの気持ち分からないのだ。

『あたしが何か悪いことをしまして？』と、その唇は
ささやく。

「あなたが悪いことを？ それならむしろ、光り輝く
大空の大天使も、とうに咎を受けているさ。

それでもあなたの罪は、わたしにとって小さいもの
ではないのだ。

あなたの罪の重さは、とてもあなたには分かり得な
いし、わたしも今さらあなたに話して聞かせる気力は
失せた。それでもあなたは知りたい？

では言おう。——あなたの青春。わたしの老年。」

処世術

安らかでありたいと願うなら、交際つきあひをしても独りで生きなさい。何事も企てようとせず、ちよつとしたものも惜しんではいけない。

幸せでありたいと願うなら、まず学びなさい、苦しむ術すべを。

(VI.1878)

「おお、わが青春！……」

おお、わが青春！ わが生氣よ！——そのむかし、わたしもこう叫んだものだ。けれど、ああ、こう叫んだ頃は、わたしはまだ若く、生氣にあふれていた。

あの頃はただ、悲哀をもて遊びたかっただけだったのだ。——人前では嘆き、その実、内心ではそつとそれを楽しもうとしただけだったのだ。

今、わたしは何も言わない。声をたてて、過ぎた日を惜しみ嘆くこともしない。……失われた日々がじりじりと身を咬む今となっては……

「ええい！ 思わぬ方がましき！」——百姓たちはうまいことを言うものだ。

わたしが死んで……

わたしが死んで、わたしであったすべてが灰となって
四散するとき——ああ、わたしのただひとりの友よ、
愛してやまぬいとおしきあなたよ、なお恐らくは生き
ながらえるあなたよ、——わたしの墓を訪ねてはいけ
ない。……いや、それ以上に、日々の営み、その哀樂
のさなかに、わたしを思い出すな。……わたしはあな
たの生を妨げようとは思わない。けれど独りでいる折
りふし、ふと故知らぬひそやかな悲哀が、優しいあな
たの心のうちに湧いたならば、過ぎし日のわたしたち
の愛読の書を手に取り、あの日ごろふたりの眼がしら
に、言わず語らずおなじ思いの涙をにじませた、あの
ページあの行、さらにあの言葉の行方をたずねたまえ。
読み、まなこを閉じ、わたし方へ手を伸べたまえ。…
…姿のないあなたの友へ、手を伸べたまえ。
わたしの手は、もうあなたの手を握る力もなく、草葉

の陰にじつと埋もれていよう。けれど、そのときあなたの手にふれるかすかな風がありはしまいか。それを思えば心は楽しい。

そのとき、あなたの前にわたしの姿が立ち、涙はあなたの閉じたまぶたを漏れ落ちてゆくだろう。あの日ごろふたりして美の女神の前に流したあの涙が。……ああ、わたしのただひとりの友よ、愛してやまぬいとおしきあなたよ！

(XI.1878)

君は泣いた

君は泣いた、わたしの不幸に。わたしも泣いた、君の同情が身に染みて。

けれど君は、自分の不幸に泣いたのではないのか。それをただ、——わたしのうちに見ただけではなかったか。

(VI.1881)

漂泊

伊良子清白

蓆戸に

秋風吹いて

河添の旅籠屋さびし

哀れなる旅の男は

夕暮の空を眺めて

いと低く歌ひはじめぬ

亡母は

處女と成りて

白き額月に現はれ

亡父は

童子と成りて

圓き肩銀河を渡る

柳洩る

夜の河白く

河越えて煙けぶりの小野に

かすかなる笛の音ありて

旅人の胸に觸れたり

故郷の

谷間の歌は

續きつゝ断えつゝ哀し

大空と返響こだまの音と

地の底のうめきの聲と

交りて調は深し

旅人に

母はやどりぬ

若人わかびとに

父は降り

小野の笛煙の中に

かすかなる節は残り

旅人は

歌ひ續けぬ

みどりこ

嬰子の昔にかへり

微笑みて歌ひつゝあり

安乗の稚兒

伊良子清白

志摩の果安乗のはて小村こむら

早手風岩をどももし

柳道木々を根こじて

虚空飛ぶみそら斷れのちぎ細葉

水底の泥を逆上げみなぞこさかあ

かきにごす海の病いたづき

そゝり立つ波の大鋸おほのこ

過よげとこそ船をまつらめ

とある家やに飯蒸いひむせかへり

男をもあらず女めも出で行きて

稚子ひとり小籠に座り

ほゝゑみて海むかに對へり

荒壁の小家一村 ひとむら

こだま 反響する心と心

稚子ひとり恐怖をしらず おそれ

ほゝゑみて海に對へり

いみじくも貴き景色

今もなほ胸にぞ跳る をど

少くして人と行きたる わか

志摩のはて安乗の小村

君に

村山槐多

げに君は夜とならざるたそがれの
美しきとどこほり

げに君は酒とならざる麥の穂の
青き豪奢

すべて末路をもたぬ

また全盛に會はぬ

涼しき微笑の時に君はあり

とこしなへに君はあり

されば美しき少年に永くとどまり

その品よきばつちりとせし

眼を薄く寶玉にうつし給へり

いと永き薄ら明りにとどまる

われは君を離れてゆく

いかにこの別れの切なきものなるよ

されど我ははるかにのぞまん

あな薄明に微笑し給へる君よ。